

2021年度第3回生物多様性の保全に向けたネットワーク会議 議事要旨

日時：2022年1月20日（木）18:30～20:30

会場：オンライン（zoom ウェビナー）

参加者：75名

内容

●基調講演：「大阪の川・水辺の生物多様性」（大阪府立大学 平井規央教授）

大阪には、周囲の山から流れてくる川がいくつかあり、大きな川としては淀川と大和川がある。淀川は京都から流れてきて海に流れ込むが、その途中に整備されたワンド群があり、そこで多様な生き物がみられる。大阪は水の都と言われて古くから水とのかかわりが強い町であり、かつては多様な水生生物がいたと考えられ、その遺産を今に見ることができると思っている。

大阪南部は昔から水不足で悩まされてきたためたくさんのお池がある。関西空港の近くを流れる榎井川の上流の小学校では、小学校で以前から川の観察会をやっているが、自然が豊かでいろんな生物が見つかる。わなを仕掛けると、主にカワムツ、オイカワが採れ、珍しいものではアカザ、シマヨシノボリ等が見つかる。カゲロウ、トビケラ、カワゲラ、トンボの仲間など水生昆虫が多い。観察会では、地域の生き物を身近に感じてもらえることができているのではないと思う。堺市の百済川での生き物観察会では、クロベンケイガニ、モクズガニ、カワアナゴ、ゴクラクハゼ、チチブ、ボラ、フナなど、約20種の生き物が見つかった。当初はコイやカメしか見つからないだろうと予想していた地元の方々は、昔たくさん生息していたフナが今もまだ残っていることに感動していた。大和川での生き物観察では、コイの幼魚、マハゼ、カマツカ、ウナギの稚魚などが見つかった。淀川では、2012～2013年に全国分布は極端に局地的で少ないとされているヒメイトトンボが見つかった。

大阪は水域に覆われた歴史もあり、いろいろな生物が見られる。観察会をすると意外なものが見つかることがある。それを地元の人に伝えることで生物、生物多様性を知ってもらって大切にしたい気持ちが芽生える契機になれば良いと思う。

●報告：「昔の東横堀川の姿をもう一度・・・」（大阪 ECO 動物海洋専門学校 城者定史）

大阪 ECO 動物海洋専門学校 野生動物・環境保護専攻の学生が水上自転車を使って東横堀川の紹介を行う動画を上映。動画では、東横堀川に残る石垣は様々な生物の隠れ場所となっており、その生物を狩るために生物が集まる場所となっており、その付近では水処理施設で処理した水が放出されていることなどを紹介。1960年代には水の汚れを表すBODの数値は30mg/lまで達していたが、現在は2mg/l以下となっており、水質の向上により東横堀川にはオイカワやコウライモロコなど姿が見られるようになっている。

大阪市内の都市部の川でも、人が近づけるよう整備されてきている。環境について考えるとき、特別な場所に行くことも大事だが、自分の一番身近な水辺環境に目を向けていくことが非常に大事なことだと考える。人が関心を失ってしまった水辺はどんどん悪化するので、水辺とふれあえる、親しめるきっかけを作っていけたらと思っている。

●リレートーク（1）：「淀川のシンボルフィッシュ・イタセンパラの保全活動を通じて」（大阪工業大学城北水辺クラブ 久井克真）

淀川の天然記念物イタセンパラの生活史について紹介。イタセンパラは二枚貝に産卵するため、二枚貝が存在しないと子孫を残せないが、近年城北ワンドに増加しているヌートリアが二枚貝を捕食

してしまい、稚魚が減少することが懸念されている。城北水辺クラブでは、イタセンパラ及びかつてワンド群に生息していた在来魚の保全を行っている。活動は、城北水辺クラブ単独ではなく、NPO法人淀川水域イタセンパラ保全市民ネットワークや大阪府環境農林水産総合研究所・生物多様性センターの支援を受けて実施している。2021年度においては、城北ワンド及び庭窪ワンドで魚類生息調査を行った。調査範囲に網を張り、在来魚と外来魚に分けて捕獲しているが、その中にイタセンパラが含まれる場合は、別途捕獲数の記録・体長計測後すぐにワンドへ戻す配慮を行っている。その他の魚類は、捕獲数・魚種・体長計測結果を記録し、写真を撮影後、在来種のみワンドへ返し外来魚は研究用に持ち帰っている。今年度の調査結果について、イタセンパラの捕獲数は2019年から減少傾向になっているが、コロナ禍で駆除ができなかったため外来種は増加傾向にある。コロナ禍以前には、外来種の駆除の成果がイタセンパラ及び在来種の個体数に表れていた。

より広くワンドの保全活動の必要性を大学生や旭区民に知ってもらふ啓発活動を目的に「釣り大会」の開催支援や、広報活動にも取り組んでおり、2019年には全国タナゴサミット（栗東市）での研究発表も行った。調査だけでなく研究発表等を通じ学ぶことで、今後の淀川の環境保全・イタセンパラの再生保全への貢献につながると考える。

●リレートーク（2）：「まちなかにふれあいの水辺・親水空間」（おお川水辺クラブ 新里嘉孝）

おお川水辺クラブは、清掃活動、生き物調査、水質調査、野鳥観察をはじめ、水源涵養林やヨシ原の保全、環境保全に関する情報の収集・発信などの取組を紹介。特に、居住エリアでは地域の方々と活動を展開するなど、他団体等とつながる仲間づくりを大事にしている。大川での魚類調査時は、日本野鳥の会とともに野鳥観察会も行っている。2014年の調査時には、魚類については、オイカワ、コウライモロコ、フナ、アユ、ヨシノボリ、ハマゼ、ボラ、スズキ、外来種だがタイリクバラタナゴ、オオクチバス、ブルーギルがみられ、野鳥では、カルガモ、カワウ、ハクセキレイ、アオサギ、ユリカモメ、ヒヨドリ、ツグミがみられており、都心部の大阪市にも生物多様性を育む水辺が存在していることが分かった。

ふれあいの水辺は、環境団体の声やワークショップにより現在の形となっている。日本には急流・急峻な川が多いが、淀川は延長 75km の比較的緩やかな川で、大阪市内では川と共生しやすいエリアに位置するため、水とふれあえる場所を作っていく「まちづくり」が大阪の価値を高めると考える。また、自分たちの川、町という思いを持つところに新たな価値が創造できると考える。魚が集まれば人も集まると考えるため、これからもいろんな方々と川について考えていけたらと思う。

●リレートーク（3）：「まちなかの新しい水辺拠点「β本町橋」の可能性」（一般社団法人水辺ラボ 杉本容子）

水辺ラボは、まちの魅力づくりを目的として活動している。β本町橋は、2021年8月28日に大阪府中央区の東横堀川の中ほどにオープンした水辺の拠点で、川に親しめる場所として運営している。2005年度に大阪商工会議所が中心となり、地域の方々とともに川を活かすためのワークショップを立上げ、汚れた橋の掃除や緑を植える等、地道な活動をスタートさせた。川辺でのピクニックやコンサートの実施、川が見えるウッドデッキの設置等の社会実験を経て、β本町橋がオープンしたことを紹介。船着き場やすぐに水面に降りることのできる浮棧橋等があり、誰もが日常的に川を眺め、水面に降り、川に近づける場所となっている。地域の子供たちに川の環境に親んでもらうことを大事にしながら運営をしており、東横堀川にどんな生き物がいるか子どもたちと一緒に知ること、より川に関心を持ってもらえるのではないかと考えている。

●リレートーク（４）：子どもたちを水辺に近づけるために（元公立中学校理科教員 河合典彦）

子どもたちを水辺に近づけることは、今の大阪ではなかなか難しいが、「無関心は環境保全上の最大の敵」と常々思っており、関心を持ってもらうことが大前提であると思う。

十三干潟や柴島再生干潟をはじめ、各地点での水辺の状況や、外国での河川計画・設計等を比較して紹介。淀川では、洪水対策の整備と合わせて、低水護岸（コンクリート張りの護岸）により、水辺に近づきにくい現状ではあるが、一昨年からの護岸撤去の取組により水辺の再生が始まっている。中之島付近の水辺では、クロベンケイガニが生息しており、このようなところで水辺の再生が図られると、いろんな生き物が見られるのではないかと考える。

「自然体験が子供たちの成長に好影響を与えるデータ」（引用：令和２年度体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト報告書（2021年9月8日公表）が示されていることから、教育関係者が大阪市の環境に学ぶ機会が必要と思う。やはり、環境を知るには実体験が大事だと思うため、いつでも子供だけで行ける水辺が整備されることを願っている。

●リレートーク（６）：「野鳥園の今」（野鳥園臨港緑地野鳥ガイドボランティア 端薫一）

1983年開園の野鳥園臨港緑地では、観察所や展望塔等の施設を備えていることについて紹介。現在は20名の野鳥ガイドが年間36回のガイドを行っている。年間のイベントとしては、冬のカモ観察会（1月）、春の観察会（3月）、干潟の生き物調査（6月）、夜のアカテガニ観察会（8月）、ボランティアによる清掃活動（11月）などがある。観察所には、観察記録ボードがあり、観察された鳥の情報が寄せられている。様々な生き物を観察することのできる野鳥園にぜひ来ていただきたい。

●リレートーク（６）：「どっこい生きている『淀川産（よどがわもん）』」大阪市の漁業（大阪市漁業協同組合 畑中啓吾）

大阪市漁業協同組合では、淀川の河口域から大堰までの約10kmが汽水域で漁業範囲となっている。汽水域は、川から真水が流れてきて、海からは海水がのぼってくるため、干潮満潮があり真水になったり海水になったりと環境変化が激しく、さらに植物性プランクトンなどの魚のエサが豊富にある。淀川の汽水域では、①幼稚期に生息する海の魚介類（ヨシエビ・カレイ類）、②汽水域で生息する魚介類（ヤマトシジミ）、③幼稚期に生息する川の魚（アユ）、④エサを取るために生息する海の魚（スズキ、クロダイ、ボラなど）、⑤海で生息し産卵のため川を遡上する魚（サツキマス）、⑥汽水域で生活し産卵のため海に下る魚（マハゼ、ウナギ）がみられることを紹介。

環境学習としては、中高生と一緒に石干見（いしひび）を作った。石干見とは、干潮時に石を組んで、満潮時に石垣の内側に水が入り、再び水が引いていく際に魚を捕るといった昔ながらの伝統漁法。夏場に実施したときには、ハゼの幼魚が捕れた。

漁業組合では、ウナギは江戸時代から同じ捕り方、シジミの漁は鋤簾（じょれん）を使用している。夏場はウナギ、冬場にはハゼを捕って直接販売している。浅場や干潟など環境をよく整えると魚は増えてくる。捕るだけでなく、環境のことを考えながら漁業を営むことが大事だと思っている。

●講評（大阪府立大学 平井規央教授）

「大阪の川・水辺は今」をテーマに、様々な話題を提供いただいた。全体を通じて、地域住民に川に関心を持ってもらうのが大事だ、人が川に近づけるようにすることが重要だということが分かった。今回の会議をきっかけに、本日お話いただいたみなさま、視聴者のみなさまが、相互に交流する

ことができれば、大阪の水辺の生物多様性の取り組みがより促進されるのではないかと考える。